

音楽のまちの「大行進」 伝統を継ぐ

北海道音楽大行進
実行委員長
みなみ やすかず
南 裕一さん



音楽大行進は、先人たちの熱い思いでこれまで開催を重ね、音楽のまちの市民行事として定着しました。全国最大規模の音楽パレードで、数千人が10数万人の観客を前に演奏する、年に1度の晴れ舞台。子供の数が減っても盛り上がりは変わりません。コロナ禍で2年連続中止となりましたが、今年の第90回は、ぜひ実現させたいです。



第1回慰霊音楽大行進



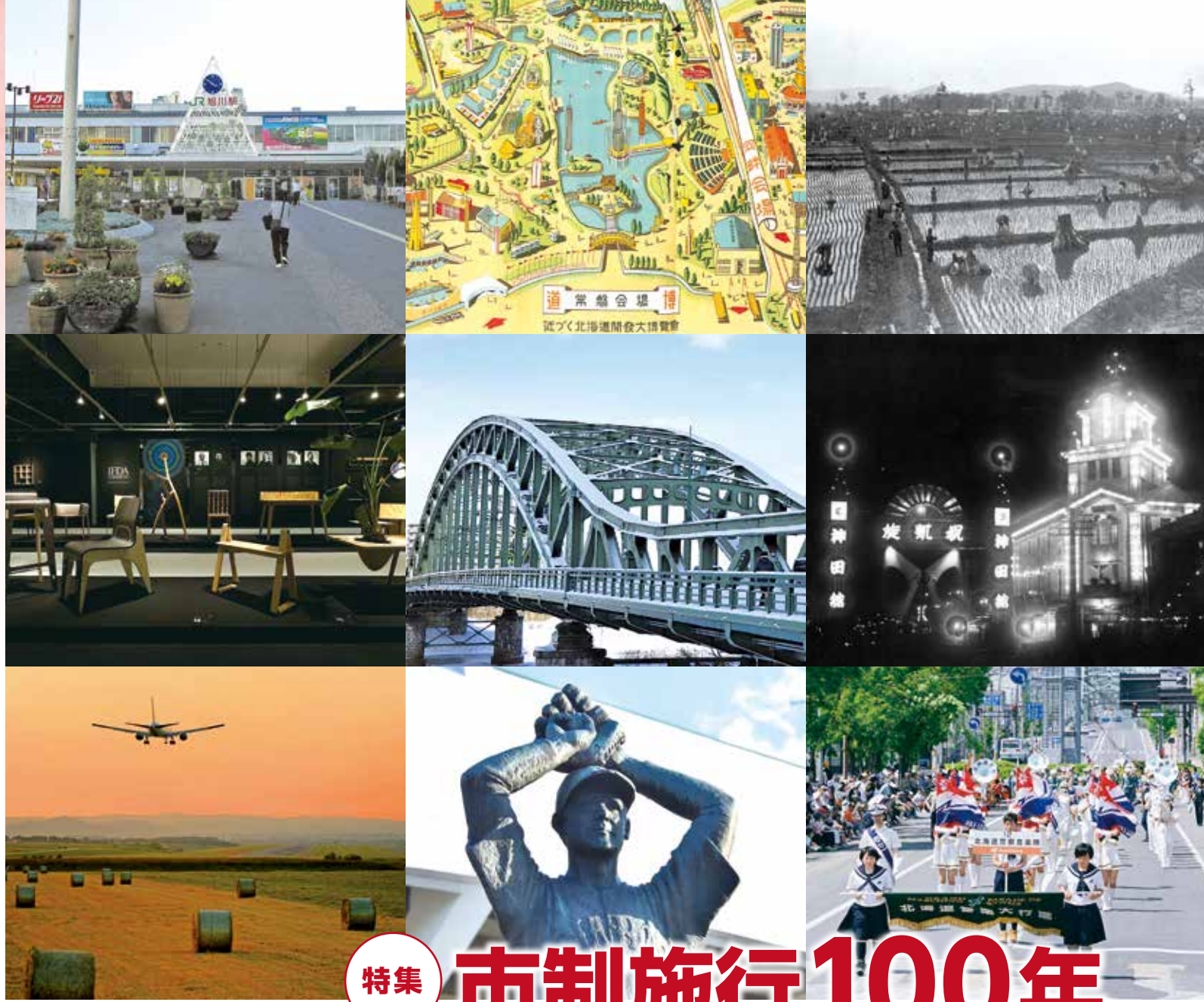
師団通のすずらん灯（昭和10年代）

市制施行から戦時体制まで
今から100年前の大正11年、ベストセラー『氷点』の作家・三浦綾子（つるあやこ）が誕生しました。同年8月1日、旭川は札幌・函館・小樽・室蘭・釧路と共に、市制が施行されました。

・菓子商・呉服店などの小売店の他、「佐々木座」や「神田館」といった劇場や活動写真館が建ち並び、商店街が形成されました。すずらんをイメージした街灯が、4条通をはじめ1条通から6条通に次々と設置され、旭川の名物として夜景に詩情を添えました。

改称され、道内最大の音楽イベントとして親しまれています。人口が増え、都市機能の整備が進む中、旭川は水害に悩まされており、治水工事が不可欠でした。昭和5年に牛朱別川の切り替え工事が始まり、埋め立て地には常磐公園やロータリーが整備され、昭和7年、旭橋は現在のものに架け替えられました。

年	出来事
明治18年（1885年）	岩村通俊らが近文山より国見
明治23年（1890年）	上川郡に旭川・神居・永山の3村を置く
明治24年（1891年）	永山村に屯田兵入地
明治33年（1900年）	旭川村を旭川町と改称
明治35年（1902年）	国内最低気温、氷点下41・0℃を記録
大正3年（1914年）	旭川区となる
大正11年（1922年）	市制施行
昭和4年（1929年）	第1回慰霊音楽大行進（現北海道音楽大行進）を開催
昭和5年（1930年）	市立診療所（現市立旭川病院）を開設
昭和7年（1932年）	石北線全線開通 現旭橋完成
昭和9年（1934年）	旭川ガス株式会社 市内にガス供給開始
昭和11年（1936年）	ロータリー完成
昭和15年（1940年）	国策バルブ工業株式 社（現日本製紙）が旭川工場操業開始
昭和20年（1945年）	師団通を平和通と改称



特集 **市制施行100年
旭川のあゆみ**

本市は、大正11年8月1日に市制が施行され、今年で100年を迎えます。年表と写真でまちの歴史を振り返ります。

旭川の始まり

明治18年、司法大輔であった岩村通俊らは、近文山から国見を行い、上川原野の開墾に可能性を見いだし、上川に離宮の設置を建議しました。設置は実現しませんでした。明治23年に旭川・神居・永山の3村が置かれ、翌年から屯田兵による開拓が進み、本市の米作りの歴史が始まります。寒冷地での稲作は不適といわれる中、先人たちの不屈の精神により、今日の基幹産業が形成されました。また、大雪山系の豊富な伏流水と寒暖差に恵まれた環境は、酒造業の創業を後押しし、職人たちの努力によって、旭川は「北海の灘」と呼ばれるまでに成長しました。

明治30年代、鉄道が開通し、第七師団司令部が札幌から旭川に移駐すると、人の往来が急増。様々な需要が生まれて商工業が発展し、明治33年に旭川町となり、大正3年に札幌、小樽、函館に次いで4番目に旭川区となりました。

一方で、自然と共存する独自の文化を築いてきたアイヌの人たちは、明治政府の同化政策による貧困や差別に苦しみながらも、民族としての誇りを持ち続けてきました。



旭川の上質なパウダースノーを満喫

情報発信と商品開発で観光回復へ

台湾から移住
大雪カムイミントラDMO
何 雨庭さん



大自然や雪、都市と農村のバランスに引かれ、DMOに就職しました。コロナの影響でこの2年は多くの企画が中止され、観光には厳しい状況が続いていますが、ツアー内容の考案や情報発信を続けています。大雪エリアでできる日本文化の体験や冬のアクティビティーなどを、多くの人に楽しんでもらいたいです。



平成から令和、新たな時代へ

昭和の終わり頃には、買物公園にファストフード店が進出するなど、海外や一部の大都市のみであった新たなモノやサービスが旭川にも取り入れられ、生活様式も変わっていきました。平成に入りバブル経済が崩壊すると、市内の商業も大きな変化を迫られました。官民一体の象徴として発展してきた家具産業では、婚礼家具の需要が落ち込み、たんす等の箱物家具の売上が減少。需要の変化に

対する、デザイン力を磨き、椅子やテーブルなどの脚物家具の生産に注力していきます。酒造業では、ビールや洋酒の消費量が増え、日本酒の気配が低迷。各社は消費者のニーズに応じた新商品の開発や、海外展開を加速させるなど、飽くなき挑戦を続けてきました。平成の半ばに入っても国内消費は低迷が続きます。国は打開策として「ビジット・ジャパン・キャンペーン」で外国人観光客の誘致を始めますが、当初、外国人観光

「ワクワクするまち・旭川」へ

先人たちは、災害や戦争、社会の変化など多くの苦難を乗り越え、現在の旭川を築いてきました。コロナ禍で私たちの生活は一変しましたが、市民・行政が手を携え、次の100年に続く「ワクワクするまち・旭川」をつくり上げていきます。

【詳細】政策調整課

☎25・5358

スタルヒン球場は「夢の場所」

旭川実業高校から
千葉ロッテマリーンズへ
田中楓基さん



小学生の頃から、勝つと周りの人が喜んでくれることが原動力でした。スタルヒン球場は昔から夢の場所で、応援されて投げる姿を思い描いていました。今では高校3年間の思い出が詰まった、大切な場所です。皆さんの期待に必ず応え、野球界を盛り上げたいです。野球界の大先輩である田中将大投手と同姓ですが、「田中といえば楓基」といわれる投手を目指します。



混乱期の市民生活を支えた露店



オープン当時の買物公園



多くの観客でにぎわうスタルヒン球場

戦後復興から高度成長への占領下に置かれると、旭川にもGHQが約5千人進駐しました。第七師団は解体され、師団通は平和への願いを込めて「平和通」に。資産を失った引き揚げ者らによる露店が開設され、食糧難とインフレが続く市民生活を支えました。社会が安定するにつれ、国策パルプ旭川工場の再開、各醸造元の再始動、急行列車の運行復活など、経済活動が回復。昭和25年に開かれた北海道開発大博覧会は、市内

に明るさと活気をもたらし、戦後復興の契機の一つとなりました。昭和30年代に入ると、民間の積極的な設備投資に加えて、東京五輪や大阪万博の需要を背景に高度経済成長期を迎えます。市内においても、様々な施設やインフラが整備され、昭和41年に旭川空港が開港、翌年には旭山動物園が開園しました。日本にマイカーブームが訪れ車が急増すると、平和通にも車があふれ、交通事故が多発しました。事故の不安をなくし、子供が遊び、大人が買い物を楽しむなど、自由

に憩える場所にしたい。そんな思いが関係省庁を動かし、昭和47年に平和通買物公園がオープン。全国初の恒久的な歩行者天国として脚光を浴びました。戦前から市民のスポーツの場として親しまれた近文公園は、施設の老朽化に加え、市民の体育・余暇活動の需要増と多様化を受け、施設充実への要望が強くなりました。昭和50年代、隣接する競馬場跡地を買収し、陸上競技場や総合体育館（現リアルター夢りんご体育館）等が整備され、市営球場は旭川で育った名投手・スタルヒンの名を冠して改築されました。平成3年に花咲スポーツ公園と改称し、今も多くのスポーツ大会等が行われています。

平成元年 1989年	韓国水原市と姉妹都市提携
平成2年 1990年	国際家具デザインフェア旭川を開催
平成7年 1995年	中国哈爾濱市と友好都市提携
平成12年 2000年	中核市へ移行
平成15年 2003年	平和通買物公園がリニューアルオープン
平成18年 2006年	旭山動物園の7月と8月の月間入園者数が日本一
平成16年 2004年	旭川と韓国ソウル、旭川空港初の国際定期便就航
平成23年 2011年	旭川駅新駅舎（4代目）が全面開業
平成26年 2014年	駅周辺開発事業「北彩都あさひかわ」が完成
平成27年 2015年	鹿児島県南さつま市と姉妹都市提携
平成30年 2018年	旭川空港国際線ターミナルがオープン
令和元年 2019年	ユネスコ創造都市ネットワークのデザイン分野に加盟認定

昭和25年 1950年	北海道開発大博覧会を開催
昭和30年 1955年	神居村・江丹別村合併
昭和36年 1961年	永山町合併
昭和38年 1963年	東旭川町合併
昭和41年 1966年	旭川空港開港
昭和42年 1967年	旭山動物園開園
昭和43年 1968年	東旭川町合併
昭和46年 1971年	東鷹栖町合併
昭和47年 1972年	平和通買物公園がオープン
昭和56年 1981年	第1回旭川国際アイススケート大会（現アイスローケット・ジャパン）を開催
昭和59年 1984年	スタルヒン球場がオープン